

体罰に代わる教育手段としての警策

梅 内 幸 信

第1節 否定的なもの

自由・平等・博愛をスローガンとして掲げたフランス革命は、単にフランスにおける革命というよりは、むしろ世界観の修正を迫る世界的な大事件であった。これによって旧制度が崩壊するとともに、旧来の価値観・歴史観も大きな修正を迫られたのである。換言すれば、旧来の世界把握の諸範疇が無効となり、それに代わる新しい諸範疇が求められたのである。この激動と混乱の時代にあつて、「美しいもの」「完全なもの」「崇高なもの」に対抗して、その対極にある「醜いもの」「不完全なもの」「卑小なもの」が、それらと同等の存在権を主張し始めたのであった。アリストテレス以降、芸術の対象は「美しいもの」、すなわちなんらかの意味において人間の「高級感覚」に快適感を与えるものに限定されてきたのであったが、ここに至って芸術の対象の中に、人間に不快感を催させる「醜いもの」までが堂々と入ってきたのである。この時代の趨勢に応えるかのように、1853年にK. ローゼンクランツの『醜の美学』（Ästhetik des Häßlichen）が出版される。彼は、その著書の中で「醜」の概念を次のように弁明している。否定概念として生物学には「病気」が、そして倫理学には「悪」が、法律学には「不正」が、宗教学には「罪」がある。従つて、「美の理念」，「美しいものの制作，すなわち芸術」，「芸術の体系」という三大時範疇を包括する名称としての「美学」は、当然のことながら美の否定概念である「醜」をも含まなければ片手落ちであると。¹

フランス革命以降の「否定的なもの」の復権は、日本において第二次世界大戦後、アメリカからの民主主義の導入により、ますます強力に推進されたと言える。女性の参政権も認められ、男女平等という思想は、戦前では想像できなかったほどまでに世の中に浸透した。裁判においても、「罪を憎んで、人を憎

まず」という基本方針が貫かれ、一般に犯罪者にとって有利な判決が下されるようになった。実際、「犯罪者とはいえ、その者に死刑の判決を下すことは、非人道的だ」との印象を与えがちであったことは否めない。人間誰しも、進んで非人間的だと言われたくはない。こうして、犯罪者に比較的軽い処罰を加えることが、裁判官にとっても「人道的だ」という印象を与える傾向がでてきたと思われる。

日本が、戦前の道德の延長上にあつて、比較的安全な社会であつた時期には、こうした「犯罪者にやさしい法律」も、人道的であつたかも知れない。しかしながら、受験戦争が過激になり、学校での道德教育がほとんど意味をもたなくなり、加えて贅沢な生活を求め、夫婦共稼ぎをし、子どもの躰に時間を割くことができない家庭が増えてきている現在、人間の心は不安定なものとなり、抑圧された感情の爆発が陰惨な悲劇をもたらすことも珍しくない。さらに、国際化に伴い、アジア諸国からばかりではなく、世界各国から、貧困と暴力から生ずる殺伐とした心情に支配された人々が、まるで無力な子羊を狙うかのように、日本に流入してきている。

未だ記憶に新しい「サリン事件」を引き起こしたオウム真理教の教祖、麻原彰晃の裁判は、10年の歳月が経っても、最終判決はでていない。犯行の証明に多大の労力と費用（税金）が使われている。これで「死刑判決」が下されなければ、今もなお後遺症に苦しみ、たいした補償も得られなかった被害者の気持ちは、癒されないであろう。

犯罪者が、自分の罪を認め、その罪を悔い、反省しているのであれば、被害者の心情も、少しは慰められるかも知れない。しかし、犯罪者が、自分の欲望に任せて犯罪を犯し、しかもその罪をまったく反省もせず、更生の可能性も感じさせないとすれば、被害者が「法が裁いてくれなければ、自分で復讐する」と言い切ったとしても、致し方ないと思われる。平成18年6月21日（水）の新聞に載った次のニュースは、犯罪と死刑判決を再考する格好の事件であると考えられる。

「山口県光市で99年、主婦（当時23）を強姦しようとして死なせ、長女（同11ヶ月）も殺害したとして殺人と強姦致死、窃盗の各罪に問われた元少年（25）に対し、最高裁第三小法廷（浜田邦夫裁判長）は20日、無期懲役とした二審・広島高裁判決を破棄し、審理を差し戻す判決を言い渡した。」²

一方、平成18年7月4日（火）の新聞には、「なぜ重い罪適用されぬ」という記事が載っている。

旧名瀬市（現奄美市）で飲酒運転の車によるひき逃げで男性が死亡した事故で、男性の母親、佐藤悦子さん（54）＝大分県国東市＝が3日、県警に捜査内容を明らかにするよう求めた公開質問状を出した。「これは交通犯罪。なぜ危険運転致死罪が適用されなかったのか。捜査が適切だったのかを明らかにしたい」。³

加害者にやさしい処分は、それでなくとも法的補償の少ない被害者の悲しみを増やすばかりである。勧善懲悪の精神が社会の中で支配的でないとすれば、被害者は、法律を、ひいては政府と国家を信用しなくなる。最終的に、この国家への不信が、国家の基盤を危うくするであろう。鬱積した感情をもつ被害者は、やがて加害者へと変貌しかねないのである。

第2節 善と悪の判断について

筆者は、長年グリム童話研究に取り組んできたが、その研究によってますます確信を強めたのが、グリム童話における「勧善懲悪の精神」であった。周知のように、民俗童話の中では必ずといってよいほど冷酷な継母や義理の兄弟姉妹、意地悪な魔法使いといった、なんらかの意味において主人公に危害を加え、不幸にする要因が与えられている。にもかかわらず、主人公たちはみな、最後にはこういった困難や障害（試練、あるいは難題）を彼らの先天的、ないし後天的徳性によって克服するのである。⁴ この徳性は、その状況に応じて忍耐や

謙虚さ、勇気、思いやり、勤勉さ、従順さ、賢明さ等となって現れる。この意味において、童話世界においては、悪を滅ぼし、不公平を是正する勧善懲悪の精神が支配していると考えられる。童話世界におけるこの作用を、A. ヨレスは「素朴な道徳」⁵と呼び、K. ランケは「童話の機能」⁶として把握している。ペローの童話集の表題である「過ぎし昔の物語ならびに教訓」もまた、このことを間接的ながら裏付けていると言えるであろう。このことに関連して、M. リューティ (Max Lüthi) が、童話の主たる作用を「一種の精神的、あるいはまた精神療法的作用」⁷としている見解は、ユングの深層心理学的童話分析を考慮に入れると、非常に興味深い。

このような認識から出発し、筆者は、中学・高校の教員を志望する学生28名を対象として、平成17年後期の授業において「善悪の総合的判断と教育的効果について」というテーマで、受講生と討論してみようと思い立った。最近、大学の教育において「ディベート能力の養成」というスローガンが、かまびすしく叫ばれているので、これに沿った形で授業を実現できれば幸いと考えた。ただし、小中高の教育課程において、ペーパーテストによるだけの訓練を受けている学生に「ディベート能力」は、決定的に欠けている。大学生になって急に、国際化にともなってこの能力を身につけさせようとするのも、しょせん短兵急な発想である。少なくとも、早い段階での「口頭試問」を義務付けることが必要である。講義・演習中にも、質問がでることは珍しい。

平成17年度後期開講の「総合演習」(火曜・5時限)は、2名の教員によって運営され、筆者が担当する演習は、10月4日から11月22日まで7回続いた。その都度の演習内容とレポートのテーマは、以下の通りである。レポートは、受講生に20分与えて、授業時間内に書いてもらった。

レポートのテーマ一覧

1. 10月4日 導入とグリム兄弟・グリム童話

テーマ: 「善」と「悪」について、それぞれ10項目列挙しなさい。

2. 10月11日 グリム童話『白雪姫』

テーマ：継母が、真っ赤に焼けた鉄の上履きを履かせられて処刑される場面を、自分なりに解釈しなさい。

グリム童話『白雪姫』（梅内訳）を配布・朗読・解説した。

3. 10月18日 『白雪姫』の解釈

テーマ：「死刑」に関する自分の考えを述べなさい。

「朝日新聞」掲載の「死刑」に関する記事を配布した。

4. 10月25日 『白雪姫』のビデオ鑑賞1

テーマ：善悪に関する家庭内での教育について、自分の考えを述べなさい。

ドイツ語による「白雪姫」のビデオを見せた。

5. 11月1日 『白雪姫』のビデオ鑑賞2

テーマ：善悪に関する小学校の教育に対する自分の提言を書きなさい。

ウォルト・ディズニー作のアニメ・ビデオ「白雪姫」を見せた。

6. 11月8日 『白雪姫』における善悪・残酷なものについて（討論）

テーマ：「体罰」に関する自分の考えを述べなさい。

「朝日新聞」掲載の「体罰」に関する記事を配布した。

7. 11月22日 「模倣」について（討論）

グリム童話『子どもたちが屠殺ごっこをした話』を配布・朗読・解説した。

テーマ：この前提を踏まえて、「残酷なものの」取扱いについて、自分の考えを述べなさい。

10月4日「善」と「悪」について、それぞれ10項目列举しなさい』についての集計結果は、次の通りである。ここでは、頻度数の順に列举し、（ ）内の数字は、意見数を示している。ただし、それぞれの項目は、必ずしも1個ではなく、いくつかの項目が一まとめになっている場合もある。

「善」

1. (28名) 協力・協調・思いやり・激励・相互の信頼
2. (17名) 約束・規則の履行, 規律 (マナー)・時間を守る
3. (17名) 正義・誠実・真実 (正直)・嘘をつかない
4. (13名) 愛情・友情・やさしさ・家族愛・動物愛
5. (13名) 素直・謙虚
6. (13名) 自分の意志・目標・信念をもつこと
7. (11名) 援助・施し
8. (11名) 努力・精進・勤勉・勉強
9. (10名) 感謝の念
10. (8名) 親切
- [11. (8名) 人の話を聞く, 12. (8名) 物を大事にする, 13. (7名) 礼儀・尊敬の念, 14. (7名) 献身・奉仕, 15. (7名) 明るく・前向き・笑顔, 16. (6名) 挨拶をする, 17. (5名) 殺傷・暴力をふるわない, 18. (5名) 反省, 19. (5名) 自然を大切に・自然との共生, 20. (4名) 親孝行をする, 21. (3名) 整理・整頓・清掃後片付け, 22. (3名) ほめられること・喜ばれること・落とし物を届ける, 23. (3名) 心が晴れ晴れすること, 24. (3名) 責任感をもつ, 25. (3名) 人に注意する, 26. (3名) 勇気・忍耐・寛大, 27. (3名) 公正, 28. (2名) 報恩, 29. (2名) 堂々とできること (うしろめたくないこと), 30. (2名) 丁寧な言葉遣い, 31. (2名) 人を好きになる, 32. (2名) 自由・平和, 33. (2名) 人をほめる, 34. (1名) 許しの念, 35. (1名) 節約, 36. (1名) 悪口を言わない, 37. (1名) 美しい・かわいいもの, 38. (1名) 人に謝ること, 39. (1名) 健康, 40. (1名) 柔軟な思考。]

「悪」

1. (26名) 規律・約束の不履行, 時間を守らない, マナー違反
2. (23名) 嘘をつく・人をだます
3. (23名) 殺傷

4. (18名) 悪口を言う・責任転嫁・思いやりがない
5. (17名) 自己中心的
6. (11名) 盗み
7. (10名) 人の話を聞かない・人をバカにする
8. (9名) 物を粗末にする・浪費
9. (8名) 暴力・脅迫
10. (7名) 裏切り・忘恩・復讐

[11. (7名) 怠ける, 12. (6名) 嫉妬・足を引っ張る, 13. (6名) 怒り・恨み, 14. (6名) 自分の考え・目標をもたない, 15. (6名) 欲に惑わされる・独占, 16. (5名) 物を壊す, 17. (5名) 人をいじめる・監禁, 18. (4名) ごみを捨てる, 19. (4名) 協調性の欠如, 20. (4名) 無責任, 21. (3名) 諦めと無関心(放棄, 放任), 22. (3名) 権力乱用, 23. (3名) 後悔するようなこと, 人を悲しませること, 24. (3名) 感謝の念がない, 25. (3名) 反省心がない, 26. (3名) 自然破壊, 27. (3名) 言葉遣いが悪い, 28. (2名) 差別・仲間はずれにする, 29. (2名) 戦争, 30. (2名) 自殺, 31. (2名) うしろめたいこと, 32. (2名) 虐待, 33. (1名) 信頼されない, 34. (1名) しかられるようなこと, 35. (1名) 友達を大切にしない, 36. (1名) 不健康, 37. (1名), 38. 遊ばない, 39. (1名) きたない・醜いもの, 40. (1名) 素直でない, 41. (1名) 外見のみ気にする。]

この集計結果によると、受講生は「善」を、1. (28名)「協力・協調・思いやり・激励・相互の信頼」、2. (17名)「約束・規則の履行、規律(マナー)・時間を守る」、3. (17名)「正義・誠実・真実(正直)・嘘をつかない」ことだと考えていることが判明する。他方、受講生は「悪」を、1. (26名)「規律・約束の不履行、時間を守らない、マナー違反」、2. (23名)「嘘をつく、人をだます」、3. (23名)「殺傷」ことだと考えていることが判明する。

ここで、少々興味深い事実は、「善」の第2位を閉めていた「約束・規則の

履行、規律（マナー）・時間を守る」が、ほぼ正反対の内容で、「悪」の第1位を占めているということである。さらに、当然のことながら、非日常的な「殺傷」が「悪」の第3位を占めている。「他人を殺傷すること」は、やはり大半の受講生は「悪いこと」と見なしているのである。

10月11日に行なわれた第2回目の授業においては、筆者が翻訳したグリム童話『白雪姫』⁸を朗読し、簡単に解説したうえで、「継母が、真っ赤に焼けた鉄の上履きを履かせられて処刑される場面を、自分なりに解釈しなさい」というテーマについてレポートを書かせた。

このレポートに基づいて統計を取ると、全体27名のうち、賛成が6名、反対が19名、保留が2名であった。つまり、70.37%が反対であった。「継母が、真っ赤に焼けた鉄の上履きを履かせられて処刑される場面」は、この種の処刑が、たとえヨーロッパ中世において実際に用いられた処刑であったとしても、現在では用いられていないし、自分がこのような目に会うとすれば、あまりにも残酷であるゆえに、反対者が多いことは、事前に予想がついていたことである。⁹逆に、22%の受講生が賛成したことのほうが、意外であった。そこで、まずは賛成者の中の代表的な意見を紹介したい。

1. こうした残酷とも言える場面を示すことで、人を殺めようとするのは、悪いことであるということを恐怖心をもって伝えることが可能であろう。
2. 私が幼いころに読んだ昔話なども、思い返してみれば、残酷ともとれる描写がたくさんありました。（舌切り雀、猿蟹合戦、花咲爺さん、など）しかし、私が記憶しているのは、その残酷さではなく、善悪を見分ける役目としての機能です。大人たちがその描写をやんわりとしたものにしてしまえば、その機能も半減してしまうと思います。
3. 今回の授業で触れた内容では、白雪姫に対する継母の行動自体が、猟師に殺させようとしたり、本人ではないにしろ、肝臓と肺臓を塩茹で

にして食べてしまうというような残酷なものだったので、最後の継母に対する罰もそれに見合ったもので良いと思う。

反対する受講生が多いという予測は事前についたのであったが、その中の代表的な意見は、次のようなものであった。

1. 妃が受けた刑の残酷さについて、この童話が収集された当時の中世では、この刑は普通のものであったのだろうが、今ではそのような刑は存在しない。たとえあったとしても、社会では受け入れられないだろう。そして次には、「目には目を、歯には歯を」という処罰が本当に良いかどうかということだ。「妃がその美しさを誇りにし、その美しさをすべてとして生きていたとすれば、その美しさを奪い、放り出す刑でも良かったような気がする。」
2. ただ残酷であるという印象ばかりが残ってしまう。……「やったらやり返せ」という解釈になってしまっているのでよくない。……例えば、鏡が、「お妃さまより千倍も美人なのは、白雪さま」と言ったとき、ショックでそのまま死んでしまったというのはどうであろう。7年ぶりに言われるショックは大きい。狂って死ぬというのでもよい。もしくは、結婚式で白雪姫を殺そうとして、逆に守衛に殺されたのなら納得いくのではないだろうか。
3. ……罪をつぐなう方法が前近代社会と現代では異なるので、時代に合ったストーリーの展開を考えた方がいいのではないかと思います。従って、ディズニーの結末の方が童話にふさわしいと思います。

確かに、残酷に過ぎると、非人間的という印象を傍目に与えがちである。人は、やはり進んで悪者になりたくはない。しかし、「罪を憎む力がなければ、悪を防ぐ力も弱い」という結果となり、その挙句には、自らが犯罪者の犠牲になりかねないことを慮るべきであろう。

最後に、「保留」した受講生は、決定的な判断を下せず、躊躇していると思

われる。

1. この原作では継母に非を認めさせるという場面がなく、ただ罰を与えているので、そこは気になりました。
2. 継母が結婚式に招待されたのは、処刑されるためである。

第3節 死刑について

10月18日に行なわれた第三回目の授業においては、『白雪姫』の解釈を行ない、その後「朝日新聞」に掲載された「死刑」に関する次のような記事を配布したうえで、『「死刑」に関する自分の考えを述べなさい』というテーマに関してレポートを書かせた。

「朝日新聞」2005年10月15日（土）

連続リンチ殺人＊「元少年3人に死刑判決」＊

名古屋高裁 一審より厳しく＊

大阪、愛知、岐阜の3府県で少年グループに暴行された計4人の若者が次々に命を奪われた連続リンチ殺人事件の控訴審で、名古屋高裁は14日午後、主犯格として殺人罪などに問われた3被告＝いずれも犯行時18～19歳＝に求刑通り死刑を言い渡した。川原誠裁判長は、1被告を死刑、2被告を無期懲役とした一審判決には「事実誤認がある」として破棄。「少年による場当たり的な犯行であることを考慮しても、4人の生命を奪った結果は重大で、3被告の役割に差はなく、いずれも死刑はやむを得ない」と量刑の理由を述べた。

犯行当時少年だった被告に死刑が求刑された事件で、同高裁が責任の重さと、矯正可能性、集団心理による少年事件特有の態様をどのように判断するのかが注目された。最高裁によると、犯行時一八歳だった少年に対する死刑判決は36年ぶりで、統計のある66年以降、同一の事件で複数の少年に対する死刑判決は初。

弁護士は上告する方針とみられ、「話し合いをして、1週間以内に結論を出す」としている。

判決は、一審で死刑判決を受けた愛知県一宮市生まれのA被告（30）＝犯行時19歳＝について、「終始、主導的に犯行に及び、グループの推進力として、際立って重要な役割を果たした」と指摘。グループのリーダーで一審で無期懲役とされた大阪府松原市生まれのB被告（30）＝同19歳＝は、「A被告が前面に出る場面もあったが、総合的にみて、A被告とともに主導的に犯行にかかわった」とした。また、一審で無期懲役とされた大阪市西成区生まれC被告（29歳）＝同18歳＝も、「グループの中での序列は一番下だったとはいえ、強制されたわけでもなく、かえって積極的に犯行に及んだ」と認定した。

判決で川原裁判長は、殺人にあたるのか傷害にあたるのか傷害致死にとどまるのかで争われ、一審判決が傷害致死罪を適用した木曽川事件について、殺人罪成立を認定。被告側が傷害致死と恐喝にとどまるとした長良川事件については、検察側の主張通り強盗殺人罪が成立するとした。

弁護側は、木曽川、長良川両事件で、3被告に殺意はなかったなどと事実関係を争うとともに、犯行当時少年だった被告の矯正可能性を強調。3被告に対し、死刑を求刑していた検察側に対し、「死刑は重すぎて不当だ」と反論していた。

キーワード：連続殺人事件

94年9～10月、少年グループが若者4人を襲い、次々に殺害したとされる。当時18～19歳だったA、B、Cの3被告らは、94年9月28日、大阪市内のビルで男性（当時26）の首をベルトで絞めて殺害し、遺体を高知県の山中に捨てた（大阪事件）。

続いて、同10月6日夜から翌未明にかけ、愛知県尾西市（現一宮市）の木曽川河川敷で、男性（当時22）に暴行を加え重傷を負わせたまま放置し、殺害（木曽川事件）。

一連の事件で計10人逮捕され、3被告を除く5人は有罪判決が確定、2人が少年院送致された。

元少年3人死刑＊「犯行に大差ない」＊リンチ殺人控訴審判決＊ うつむく被告ら

「犯行に果たした役割に大きな差はない」。名古屋高裁で14日あった連続リンチ殺人事件控訴審判決は、2人を無期懲役とした一審を破棄し、犯行当時18～19歳だった3被告全員に死刑を言い渡した。4人の命が奪われた残虐な事件から11年。被告らは罪の重さをあらためて感じ、「私たちの思いと判決が重なりあった」と遺族らは目を潤ませた。

判決文の朗読が止まった。14日午後3時過ぎ、名古屋高裁2号法廷。張りつめた空気のなか、川原誠裁判長は「前に出なさい」と3被告に命じた。少し間を置いてから主文を告げた。「いずれも死刑に処する」

首を左に傾けるA被告(30)、うなだれるB被告(30)、じっと前を見据えるC被告(29)。

それぞれ弁護人と言葉を交わし、傍聴席に向かって頭を下げ、法廷を後にした。

一審で死刑判決を言い渡されたA被告は「グループの中心」と認定されたことに不満を持ち、控訴審では「真実によって裁かれない」と訴えた。しかし弁護人によると、「こうした訴えは被害者や遺族の新たな悲しみ、怒りを招くのではないか」との迷いものぞかせた。

最近になって支援者から、教会で洗礼を受けることを勧められた。だが、「控訴審判決後にしたい」と先送りにした。「神様を利用しているように思われたくない」ためだという。

一転、死刑となったB被告は、うつむき加減で裁判長の言葉に耳を傾けていた。

一審で無期懲役を言い渡された瞬間、思わず泣き出した。控訴審では弁護人に「死刑になってもやむを得ない」と漏らしていた。3被告の中でただ一人、公判は一度も欠席しなかった。

拘置所で自ら望んで3年前から作業を続けている。金魚を入れる袋にヒモを通したり、封筒を作ったり。年間3、4万円になり、事件の遺族に送ったという。

無期懲役から死刑になったC被告は両手を組んで目をつぶり、判決理由に聴き入った。言い渡しが終わりに近づくと、タオルで顔をぬぐった。

C被告は本名を類推させる仮名で事件を報じた出版社に損害賠償を求めたり、死刑廃止を訴える団体の代表に就いたりしてきた。一方で読書や学習に取り組んでいる様子もうかがわせた。判決前日に朝日新聞記者にあてた手紙でC被告は「死刑という判決であっても、それは覚悟している」と心境を記していた。

『遺族「ずっと望んでいた」』

長良川事件で長男正史さん(当時19)を亡くした江藤恭平さん(61)は閉廷後、記者会見した。「11年間の私たちの思いと、今日の判決がすべて重なり合った。きっとあの子ども喜んでくれる」と話した。

一審からずっと傍聴を続ける中で被告らの変化を感じた。「控訴審では3人の主張が、それぞれ自分が生きるためのものになっていった」「しおらしい法廷の態度はパフォーマンス」。恭平さんの目にはそう映った。

「控訴審での態度と実態の違いを裁判所はしっかり見分けてくれた。この事件は

3人で初めて成立した。少年だとか実行行為が誰だとかいうのではなく、3人に同等の量刑、極刑をずっと望んでいた」と恭平さん。

妻のテルミさん（60）は主文言い渡しの直前、祈るように胸の前で手を組んだ。死刑が告げられると裁判官に向かって頭を下げ、隣に座った長女（34）は涙をぬぐった。閉廷後、恭平さんとテルミさんは立ち上がって裁判官席に再び頭を下げた。

渡辺春男さん（40）は長良川事件で弟の勝利さん（当時20）を亡くした。主文言い渡し直前、勝利さんの高校時代の生徒手帳を忍ばせた左胸にそっと右手を当てた。

閉廷直後、春男さんは判決をかみしめた。「死刑になっても弟は帰ってこない。この苦しみ、悲しみは一生癒せない」。一方で「事件の残虐性、親族の思いが伝わったと思う」と評価した。

この日の法廷で、暴行によって唇が裂け、体中腫れ上がった勝利さんの遺体が頭をよぎった。「被告は、判決を受け止め、罪の重さを考えてほしい。上告するなら最後まで見届ける」

勝利さんの墓前には「極刑が下ったよ」とだけ伝えるつもりだ。

解説『少年法理念に「限界」』

連続リンチ殺人事件で、名古屋高裁は、3被告全員に死刑を言い渡した。

1被告を死刑、2被告を無期懲役とした一審判決は犯行の残虐性だけにとらわれず、「少年期特有の心理に基づいた場当たりの犯行」と少年事件の特性を踏まえ、判断した。これに対し、同高裁は、少年法の理念を考慮しつつ、「おのずから限界がある」と指摘。役割や結果の重大性を検討し、3被告とも死刑やむなしの結論に至った。少年法、刑法が厳罰化の方向で改正されたばかりで、こうした流れを踏まえたといえる。

健全育成を目的とし、18歳未満の死刑を禁じた少年法に照らし、犯行時18、19歳の年長少年に死刑を適用するかどうかは常に論議を呼んできた。

死刑、無期、死刑と揺れた連続4人射殺事件（90年確定）、死刑から無期に変わった名古屋市アベック殺人事件（96年同）など、裁判所は、結果の重大性と立ち直る可能性を慎重に考慮したうえで、結論を導き出してきた。

この日の判決は「集団が適切に事態を収束できず、場当たりに犯行に及んだ」と認めつつ、犯行時18歳に対しても極刑を選択しており、少年事件における刑事裁判の節目ととらえることもできる。

しかし、従来の司法判断は、少年による事件では、更生の可能性を成人より広くとらえる傾向にあった。今回の判決は、4人の命を奪った結果の重大性、遺族の処罰感情、社会に与えた深刻な影響を十分考慮しているが、3被告の矯正可能性を、

どこまで踏み込んで判断したか、判決からはうかがえない。これまでの議論の広がりを考えれば、同種事案で、未成年の立ち直る可能性、少年事件の特性を重視する必要性は依然、大きい。(船橋宏太)

このレポートの統計をとると、全体28名のうち賛成が24名、反対が2名、保留が2名という結果がでた。全体の85.71%が賛成という結果は、筆者の予想を超えるものであった。受講生の大半は、自分が他人を処罰するということに関して、もっと臆病であるのではないかと思っていた。しかし、受講者の大半は、「犯罪者の罪」を憎んでいたのである。

記事中のC被告は、「本名を類推させる仮名で事件を報じた出版社に損害賠償を求めたり、死刑廃止を訴える団体の代表に就いたりしてきた」と言われるが、この一連の行動によってこの被告は、少年法ではどんな極悪な犯罪を犯しても、極刑＝死刑に処せられることはないという判決例を明確に知っていたことを推測させる。受講生の大半は、罪に対する後悔の念をもたない被告に同情は寄せられないという意見が大半であった。

賛成した24名のうちの代表的意見

1. 中国系の犯罪者にとって、日本はとても犯罪のしやすい国だそうです。その理由は、警察につかまっても、刑務所に入っていればいいからだそうで、罰金も、ましてやめったに死刑もなく、ただ一定期間刑務所に入っていればいいからなのだそうです。刑務所の中では仕事も与えられ、食事も出て、とっても快適らしいそうです。
2. 白雪姫の話や、中世での処刑、そして現在の日本を含めて考えてみると、やはり悪に対しての処罰は必要なものであると改めて思う。人の死に対する恐怖心を利用して、悪への歯止めの役割が、この死刑だと思う。
3. 被害者や遺族の立場を考えたとき、凶悪な殺人を犯した人は、死をもっ

てつぐないきれはしないが、死刑にすべきである。……殺された人の遺族が自らの手で犯人を殺す「あだ討ち」を止める役割もあると聞いたことがある。

4. 白雪姫の行為は、正当防衛。少年法という理念は大切であろうが、少年であっても命の大切さは理解すべきである。法の見直しによって、罪の重さをそれぞれが理解し、自身を抑制できる社会が必要だと考える。

反対者の代表的意見

1. 死刑は犯罪をおさえる効果をもっているし、実際あらゆる面から考慮して検討した結果だされる宣告であろう。しかし、それでもやはり、死刑はあってはならないと私自身は考える。
2. 私は、死刑よりも無期懲役を与えるべきだと思う。一生をかけて、生きて苦しみを実感しながら償うべきだと思う。

保留者の代表的意見

1. 更生の可能性。残された遺族の感情を考えることは、とても大事なことで。
2. 判断ができない。なぜなら、どんなに重い罪を犯した人であっても、同じ人間がその生命を奪ってもいいのか、奪う権利があるのかという点で、考えが行き止まりになってしまうからです。

10月25日に行なわれた第4回目の授業においては、『白雪姫』のビデオを鑑賞し、「善悪に関する家庭内での教育について、自分の考えを述べなさい」というテーマについてレポートを書かせた。ドイツのビデオを鑑賞するに際しては、継母は真っ赤に焼けた鉄の上靴を履かせられて死ぬのではなく、稲妻に打たれて死ぬという変更が加えられていることを指摘した。

全体28名

1. (21名) 家庭が善悪の判断力を身につける場

- 1) 私自身も、親から善悪の判断について基本的なことを教わったと思う。
間違っただけをしたとき、全身全霊でしかられた記憶は忘れないし、そのことがこれから自分で築いていく人生の中の、善悪の判断の基盤になっている気がする。
- 2) 私自身が家で親から受けた善悪の教育は、まず物を盗んではいけない、嘘をついてはいけないということでした。
- 3) 私は、幼い頃から悪いことをしたとき、しっかりとしかられていました。場合によっては、足をたたかれることもありましたが。しかし、そのとき私の両親は、必ず「なぜしてはいけないのか」という理由も教えてくれました。そして、同じ年頃の友達との遊びの中でも、善悪やルールについて、体験をもとに学んでいたような気がします。
- 4) 私は、第一子ということもあり、家庭では厳しくしつけられたと思う。小さい頃は、とにかく親が怖かった覚えがある。悪いことをしたときなど、よくたたかれた。私の親は、たたきたくはなかったそうだが、怖いという感情は教えておきたかったと言っていた。大人になって、親より強くなったときも、好き放題にふるまうのではなく、周りの人々に畏怖の念をもって、節度あるふるまいをして欲しいと言っていた。
- 5) 悪いこと、例えば妹をいじめたら、言葉によって怒られ、母親の手でたたかれることもありましたが。普段から絵本を使ったり、母親や父親が話したりして、善悪に関する教育が自然と行われていたように思います。
- 6) カトリック教を信仰する家庭で育てられた。教会や、そこに通う人々のコミュニティー、そういった他の力を借りて、自然と善悪の判断を身につけさせるのは、良いことだと思う。

2. (3名) 童話・絵本の読み聞かせ

- 1) 私が自分の子どもに善悪について教えるのであれば、やはり日々の生活の中で、悪いことをしたら注意し、なぜ悪いのかや、善いこととはどういうことなのかを教えたい。……善悪を教えるのには、童話などの本がとても役立つように思う。
- 2) 母が絵本を読んでもくれた。……私が幼い頃に、よく「今日一日どんなことをした？ なにがあった？」と聞いていました。それは、私の行動の中で良くないことがあったら、それを直すため、そして良いことがあったら、ほめて、のばしてゆくためでした。
- 3) 小さい頃を思い出してみると、親は私や兄弟に善悪の教育として、絵本の読み聞かせを行っていた。白か黒かと、善悪をはっきり教える必要がある。実際に、子どもたちの体験にそくして、一緒に考えてあげ、善と悪をはっきりと教えることが大切であると考えている。

3. (3名) 自然と身につける

- 1) 善悪の判断力は、自然と身につけるもの。……私にとって、一番心にあるのは、尊敬できる父の姿であり、彼の誠実さが一番私の心の中にあるような気がする。
- 2) 善悪についてとはっきりと題されて教えられるようなものではないから、記憶は曖昧だが、怒られることと褒められることによって学んできたのだらうと思う。怒られることが悪いこと、褒められることは善いこと、というふうに、多くのことを体験することで、善と悪の大まかな方向性が分かるようになった。
- 3) 私は、他人を傷つけたり、嫌な思いをさせる言葉を言ったり、行為を行ったりすることを悪であると言いたい。

4. (1名) 遊びが重要

- 1) 子どもは、よく遊んで、そこからたくさんのことを学んでほしいと思う。そして親は、子どもが間違っただけに進みそうになったときに、そ

れを修正してあげるくらいが適切であると思う。

このテーマに関するレポートを踏まえると、「善悪に関する家庭内での教育について」は、第一に「家庭が善悪の判断力を身につける場」、第二に「童話・絵本の読み聞かせ」、第三に「自然と身につける」が大切という意見が上位を占めている。やはり、受講生は、「善悪の教育」に関しては、学校よりも家庭における教育が重要であると考えている。このことは、「善悪の判断」は、学校以前の、家庭の躰にその源が求められるべきであることを意味しているのであろう。

11月1日に行なわれた第5回目の授業においては、ウォールト・ディズニー作のアニメ・ビデオ「白雪姫」のビデオ鑑賞した後に、「善悪に関する小学校の教育にたいする自分の提言を書きなさい」というテーマでレポートを書かせた。大半の受講生は、中学か高校の教員を目指しているので、このテーマはそれほど切実な問題ではないかも知れないが、その心構えを問うのがその狙いであった。

1. 授業や話し合いの中で：代表的意見

- 1) 小学校の教育は、自分の周りの人との関わり方を学ぶ時期であり、善悪についてもその中で教え、理解させるべきである。具体的には、学級活動などの時間を用いて、ある学級で起こりそうな出来事を一つ例にとりあげ、それをどう思うか、どう感じるか、いろいろな立場に立って考えさせてみるとよい。
- 2) 私が小学校の教師になり、善悪を教える立場になったならば、善とはどのようなことか、悪とはどのようなことかというテーマの下に話し合いをさせ、意見を発表させる時間を設けらると思う。やはり、このような道徳的な内容のことを学ばせるには、様々な人の意見を聞かせ、そして自らの考えを確立させるのが一番効果的であると思うからだ。
- 3) 私が小学生の頃は、教科書の物語、あるいは実話を読んで、その話の

中から、あらゆるテーマと論点を見つけて、考えさせるといった授業内容だった。私はこの道德の授業が好きだったし、自分が教師になった際にもこのような時間を持ちたいと考える。

- 4) 小学生には、ある行為が善なのか、悪なのか、自分で考え、判断する力を身につけさせたい。(ロールプレイは有効だと思う)
- 5) 低学年生には、善悪の区別をはっきりさせるために、勧善懲悪もののアニメや物語を見せたり、読み聞かせてやる。

2. 実生活の中で

- 1) 言葉だけで教えていくだけでなく、実際の生活の中で毎日少しずつ習慣的に意識させていくことが大切であると思う。……授業中の態度や給食、清掃中、遊んでいる中で友だち同士の喧嘩をしたときなども、教育の一つの題材として扱い、一方的に注意するのではなく、一緒になにがなぜ善かったのか、悪かったのかを考えていくことが、小学校時代の教育としては必要であるように思いました。
- 2) 二つのことに注意する。1. 日ごろから善悪を教育する環境を作る。(会や帰りの会で、さまざまな話をする) 2. 生徒が過ちを犯したときに、上手に対処する。(信頼関係を作る)
- 3) 「なにが残酷かを知らない子どもは、ひどく残酷になりうる」という考えがある。小学校での教育の中で自然体験や社会体験・奉仕活動など幅広く経験させ、人の痛みを感じ、人の喜びを分かち合える人間を育成していかなければならない。

3. 教師の指導力によって

- 1) 同年代の子どもたちと過ごしていく中で学ぶということは、とても子どもを成長させる反面、間違った道德観を身につける危険性もある。そこで適切な道を教えるのが教師だと思う。
- 2) 将来、子どもたちが自分の中に確かな判断基準をもてるようにするこ

とをめざし、きちんと子どもに理解、反省を促したうえで、教育してゆくことが必要だと思う。

- 3) 小学生時代というのは、その子の人格の根本的な部分を育てるうでとても大切な時期だと思う。6年間の各段階に応じた指導が必要だと思う。

4. ほめることとしかることによって

- 1) 私は、善いことをした生徒をよくほめ、悪いことをした生徒には真剣に向かい合って、生徒に自分が悪いことをしたと気づかせ、なぜ自分が怒られているのか納得できるようにしたい。
- 2) 生徒が善いことをしたら思いっきりほめ、悪いことをしたらしっかり注意したい。
- 3) ほめることやペナルティなどを上手に使い分けながら教えたり、他にも読書をすすめたりすることが良い方法ではないかと思う。

「善悪に関する小学校の教育に対する自分の提言を書きなさい」というテーマの性質上、自分の小学校での経験は踏まえているものの、受講者の意見の中には、やはり自分が小学校の教師になったときの願望も含まれていると考えられる。上位3位までの提言は、1.「授業や話し合いの中で」、2.「実生活の中で」、3.「教師の指導力によって」というものである。

第4節 体罰について

11月8日に行なわれた第6回目の授業においては、『白雪姫』における善悪・残酷なものについて討論し、「朝日新聞」掲載の「体罰」に関する次の記事を配布・朗読した後に、『「体罰」に関する自分の考えを述べなさい』というテーマでレポートを書かせた。その統計によると、全体で28名のうち、賛成が9名、反対が17名、保留が2名という結果がでた。つまり、60.7%が反対であった。

「体罰 指導者、知識蓄え説明を」 鹿屋体育大学教授 宮田和信

一駒大苦小牧の問題もそうですがスポーツの指導現場での体罰は尽きないようですが。

「野球で多く発覚するのは人気があり注目を集めているからだ。だが、体罰はスポーツ全般で起こっている。鹿屋体育大の学生を調査した結果、134人中、約6割にあたる85人がこれまでにスポーツの現場で体罰を受けた経験がある。さらに他人が体罰を受けているのを目撃した者の数を合わせると9割近い119人にも及ぶ」

「学生にどんな体罰を受けたのかを尋ねてみると、日常的に行われるびんたやげんこつのほか『頭を靴のまま踏まれる』『バットで殴られる』『階段から落とされる』といったものもあった。さらに体罰を受けたときの理由は『試合内容が悪かったから』『プレー中に声が出なかったから』などがあがっている」

—なぜこれほど体罰が起こるのでしょうか。

「体罰には即効性がある。口で言っても選手は無視することができるが、指導者が力で押さえ込めば聞かざるを得ず手っ取り早い。さらに体罰に対する賛成者や崇拜者が多いことも事実だ。調査で学生の7割以上が体罰に賛成している。『体罰に耐えきれないと一流になれない』とか『たたかれたおかげで強くなった』と感謝している学生もいる。体育大のような学生たちは、殴られて進学できたと思っている連中もいて体罰を支持する傾向があるようだ」

—根強い賛成派も多いわけですね。

「確かに体罰には即効性という効果があるが、リスクも大きい。たたかれたことをどう受け止めるかは選手によって違う。退部者が出たり、選手がけがをしたり、トラウマになったりする。指導者に憎しみを抱くケースもあるようだ。たたかれたことによってそのスポーツが嫌いになることもある。何より学校教育法第11条で校長や教員は『体罰を加えることはできない』と明記されている。体罰は法律違反なのです」

「ただ問題もある。この条文の中にどういった事実行為が体罰にあたるのかという定義づけがされていない点だ。76年に教諭が生徒をたたき8日後にたたかれた生徒が死亡した『水戸第五中学校事件』の裁判で、一審では生徒に対する暴行の罪を認め有罪となったが、81年の控訴審で教育活動の一環として法律の範囲内で認められる有形力の行使と判断され無罪判決となった例がある。教育指導上たたくことも認められる場合があるという判断が下されたわけです」

—どうすれば体罰がなくなるのでしょうか。

「表面に出てきたものだけが報道されているが、氷山の一角にすぎない。現在はプロ・アマチュアの区別なくスポーツは勝てば有名になりお金が入る。甲子園のよ

うな大舞台で勝てば組織全体のピーアールにもなる。それだけに体罰はものすごく隠蔽^{いんぺい}される。スポーツ指導の体罰をなくすというのは難しい問題だが、体罰にかんする条文があいまいなので具体的にどういう行為が体罰にあたるのか明記すべきだ」

「一方で指導力のなさを暴力でカバーしているケースもある。指導にかんする知識が不足しているのに自分の勘で指導し気に入らなければぶん殴るといった例だ。指導者はうんと勉強して科学的な知識を豊かにし、口で説明できるようにするべきだ。また各競技団体でも指導者に対する講習会を開き知識を増やす機会を与え、たたかなくても強くする方法を学ばせるべきです」

「体罰を肯定する者には『指導者との信頼関係があれば』とか『理性的であれば』『感情的でなければ』殴ることも許されるというものがある。だが、信頼関係があればなぜ殴らなくてはいけないのか。殴るときは感情的になっているはずだ。たいてよかったか、どうかというのは結果でしか分からない。それでも暴力をふるうというのであれば、指導者はその全責任を負わなければならない」（聞き手・堀川勝元）

生徒を叩いたり、殴ったりしてしか指導できない教師も、無能の謗りを免れない。そういう教師は、体罰によって生徒から恨みを買うだけであろう。他方、小学生のころ、同級生の女の子をみんなでからかい、そのあげく彼女に石を投げて、いじめていたら、教師に往復ビンタをもらって、ようやく自分の行為が悪いことだと気づいたという思い出を語る男子学生もいた。ここで特筆に値することは、約4割の受講生が賛成の意思を示したという事実である。そこで、まずはその賛成者の意見を紹介したい。

賛成者の代表的意見

1. 私自身の考えとしても、体罰は、極力無くすべきものだとは思いますが、教育の中での一手段であるとも思う。……体罰反対の際に、なぜそのことが悪いか話して理解させるという意見など多くあるが、必ずしも話だけでは理解できない場合など、どのように対処していくかなどの具体性がない。このような場合としての選択肢として、体罰が必要となることがあるのではないか。

2. 小学校低学年のとき、ときどき先生からげんこつをもらった記憶があります。自分がなにをして怒られたのかは覚えていないのですが、私は先生を信頼していたし、その体罰が理不尽なものでなかったことははっきりと言えます。
3. ……例えば、宿題を忘れて正座をさせただけで、体罰教師という名のレッテルを貼られて、教師を首になる教師もいるし、私は今の時代にいささか不安を抱いています。教師は、なにも生徒に暴力を振るいたくて振るうわけではないし、なによりもちょっとした行動が、体罰という名の下に処理されていくのは、あまりにも軽率ではないかと思います。
4. 「理解できるまで言い続ける」ことで、改善できないかも知れません。ただ聞き流せば、いずれ終わるので。そうしたときに、一つのきっかけというくらいのインパクトとしても効果があるはずです。また、他の子どもに暴力を振るう子どもなどには、「叩かれたら、こんなに痛いんだ」ということを教える必要もあります。

反対者の代表的意見

1. 他の人はどうか分からないが、もし私が体罰を肯定してしまったら、楽な方向に走って、口で言って聞かせる努力を怠ってしまう気がする。これから社会にでてゆく子どもたちにとって、「暴力なしでも思いを伝えたり、くみとったりする力」は、身につけるべき必須の能力だ。一時の解決で満足することなく、長い目で見て、その力を育む努力を重ねたい。
2. 子どもの頃というのは、理性的に毎日行動しているわけではなく、自分が思うまま、感情のままに行動することが多い。そんな感情的にも身体的にも未発達であるにもかかわらず、体罰を行うことは、いくら教師が加減していたとしても、子どもにとっては精神的に大きなダメージになると思う。

3. 生徒とは、100人いれば100通りの性格があるわけで、必ずしも素直に反省につながるとは言えないと思う。教師は、自分の指導力の一部として手をあげるということはあるかも知れない。しかし、それは言葉で悟らせるという技術を身につけていないがために、ただのカバーでしかないように思う。
4. 体罰を行う教師は、やはり無意識にも自分本位になっているのではと思います。……一番大切なのは、教師がいかに人間として信頼される人物であるかということではないでしょうか。体罰だけでは心に響かないと思います。私は、力による上下関係ではなく、信頼関係のあるクラスを目指します。

保留2名

1. 大事なのは、なぜ先生が怒っているのか、なにが悪かったのかをしっかりと説明することだと思う。
2. 体罰にいたるまでの段階があった。まず、悪いことをする。注意される。懲りずにまた悪さをする。叩かれる。……もし、子どもたちが悪いと分かっているながら悪事をはたらいたとき、一体どのように対処すれば良いのだろう。

11月22日に行なわれた第7回目の授業においては、次のグリム童話『子どもたちが屠殺ごっこをした話』を配布・朗読・解説したうえで、「模倣」について討論した。この後、『この前提を踏まえて、「残酷なもの」の取扱いについて、自分の考えを述べなさい』というテーマでレポートを書かせた。

「グリム童話から」

- 25 子どもたちが屠殺ごっこをした話
(第1話)

西部フリースランド（オランダ）にあるフラネッケルという名まえの小都会で、五歳か六歳ぐらゐの女の子と男の子、まあそういったような齡のいかなゐ子どもたちが遊んでゐました。

やがて、子どもたちは役わりをきめて、一人の男の子に、おまえは牛や豚をつぶす人だよと言ゐ、もう一人の男の子には、おまえはお料理番だよと言ゐ、またもう一人の男の子には、おまえは豚だよと言ゐました。それから、女の子にも役をこしらえて、一人は女の子のお料理番になり、もう一人はお料理番の下ばたらきの女になることにしました。この下ばたらきの女は、腸づめをこしらえる用意として、豚の血を小さい容器に受ける役目なのです。

役割がすっかりきまると、豚をつぶす人は、豚になるはずの男の子へつかみかかって、ねじたおし、小刀でその子の咽喉を切りひらき、それから、お料理番の下ばたらきの女は、じぶんの小さいれもので、その血をうけました。

そこへ、市の議員がはからずとおりかかって、このむごたらしいようすが目にはいったので、すぐさまその豚をつぶす人をひったてて、市長さんの家へつれて行きました。市長さんは、さっそく議員をのこらず集めました。

議員さんがたは、この事件をいっしょうけんめいに相談しましたが、さて、男の子をどう処置していいか、見当がつかません。これが、ほんの子どもごろでやったことであるのは、わかりきっていたからです。ところが、議員さんのなかに賢い老人が一人あって、それなら、裁判長が、片手にみごとな赤いりんごを、片手にライン地方で通用する一グルデン銀貨をつかんで、子どもを呼びよせて、両手を子どもの方へ一度につきだしてみせるがよい。もし、子どもが、りんごを取れば、無罪にしてやるし、銀貨の方を取ったら、死刑にするがよいと、うまいちえをだしました。

そのとおりにすることになりました。すると、子どもは、笑いながら林檎をつかみました。それで、子どもは、なんにも罰をうけないで済みました。

この統計を取ると、全体で27名のうち、必要が25名、不要が1名、保留が1名で、92.59%の受講生が、「残酷なもの」を教育の現場において取り扱う必要を認めているという結果がでた。

必要とする代表的な意見

1. 現代なら、ハンセン病患者や被爆者、ナチスの強制収容所などを、子

どもに見せたいと思う。戦争が起こったらどうになってしまうのか、そのときは明確には分からなくとも、子どもの頃に受けた衝撃は、ずっと心に残っているし、成長して同じものを見たとき、きつとなにか考える材料になるであろう。

2. 今の私自身の生きてきた22年間、あまり冒険的なことも、危険と思うようなこともしないで、悪の部分になるべく触れないようにして生きてきたような気がします。その結果、今の私は「打たれ弱く」「善悪の判断力に乏しい」人間です。子どもの頃から良いもの、悪いものを両方とも見て、幅広い価値観に触れてこそ、世の中とはどういうものか、善と悪について分かっていくのだと思います。
3. 残酷なものをまったく見せないのも危険だと思う。最近では、とても身勝手な犯罪が頻発するようになっていきます。その背景には、幼い頃にあまりに過保護に守られて育てられていることがあると思います。そのため善悪の判断が自分中心になってしまっているのではないのでしょうか。そのような犯罪の裏には、そうさせてしまった環境が隠れているのです。
4. 残酷なものを大人が伝えるときには、命の大切さとともに伝えることが必要だと思う。生徒をしかるときにも、頭ごなしではなく、しっかりと因果関係や理由を話して、ペナルティを与えていかなければならない。そうすれば、成長してからも、子どもの心に残る言葉になり、警告を与えてくれる言葉となるかも知れない。

不要とする代表的意見

1. 子どもが無知で判断力がないことも、怖いことであるが、残酷な情報を多く取り入れすぎて、うまく消化、解釈できない子どもが犯してしまう罪の方が、私は恐ろしく思う。

保留とする代表的意見

1. 私たちは、子どもを無垢、無邪気なものとして見てしまいがちであるが、一步間違えると、その無知が悲劇を生み出すことになることを知っておく必要があり、教育によってなにが善悪か、なにが現実かを考える力を養ってあげなければならないのだと思う。

子どもは、純朴であると同時に、無知なるがゆえに残酷でもある。筆者は、幼い頃トンボを捕まえては、その尻尾を切って、そこから細い草の茎を差し込み、どの程度の重さの草を、どの程度遠くまで運べるものかを実験して楽しんでた。トンボの命とか、トンボの痛みとかはまったく考えてもいなかった。おそらくトンボを何十匹となく殺したのだろう。あるとき、近所のおじさんから、「きみは実験をして楽しいのだけれど、尻尾を千切られ、重い草の茎を差し込まれたトンボは、苦痛に泣いて、死んでゆくんだよ」と、静かに諭されて以来、その実験は二度としなかったし、動植物への思いやりというものがでてきたように思う。凶悪な犯罪を犯す少年の中にも、必ずや筆者のように、無知なるがゆえの残虐行為を犯している者たちがいるに違いない。やはり、親や教師、大人は、機会あるごとに子どもたちを、しかるべく教育する義務を抱えている。

「どんな凶悪な犯罪を犯しても、少年は死刑になることはないのだから」という計算を働かせて、安易に殺人を犯す少年が少なくないという事実を踏まえれば、凶悪犯罪を犯す少年にも死刑は適用すべきだと考えられる。また、死刑が犯罪を防ぐブレーキとなりうるとすれば、死刑は存続させるのが妥当であろう。確かに、少年は「更生可能性」に関しては、その後の人生が長いだけに、大きな可能性をもっている。とはいえ、受刑者の更生可能性が「100人中5人」¹⁰ などという記事を読めば、その後の犯罪を防ぐためには、死刑の可能性も考慮に入れるべきかも知れない。宗教に寛大な国であると言われる日本で、犯罪を犯した外国人労働者が、自分の罪を「悪魔の所為」にし、処罰を逃れようとする場合も考えられる。¹¹ さらに、「解離性自己同一性障害」(通称「多重人格」)の場合、その責任問題にはきわめて難しい問題があるとはいえ、やは

りそれらの人格は、同じ一つの肉体を共有するものであるからして、一つの人格は、他の人格の行為に関しても連帯責任を負わざるをえないであろう。¹² つまるところ、日本において貧しい人々が、罪を犯すよりも餓死を選択する場合もあるという事例を踏まえれば、無期懲役を受け、刑務所の中で最低の生活を（国民の税金によって）保証されている受刑者の存在も、奇妙に思われてくる。納税者の3分の1ほどの人々が、犯罪者になって刑務所で最低の生活を選択することになったら、国は間違いなく財政的に破綻してしまうに違いない。

肝腎な点は、罪を犯す人間の心にブレーキをかける装置を組み込むことである。この道徳的装置は、やはり家庭において、両親によって子どもに組み込まなければならない。もし、両親が、幼児に真っ赤に焼けた鉄製の靴を履かせられて、踊り殺させられる白雪姫の継母のイメージを、あるいは両目をハトにくりぬかれる、灰かぶりの義理の姉妹たちのイメージを、明確に子どものデリケートな心に焼き付けたとしたら、その子どもが、なにか悪いことをしかけたときには、常に心のブレーキがかけられて、犯罪に走ることはないと思われる。さらに、家庭の中にはナイフやフォーク、洗剤など、幼児が手に取ったり、飲んだりすれば、命にかかわるようなものもある。幼児がそれを手に取ったとき、母親や父親は、口で説明しても、幼児はまだ理解できないのであるから、幼児の手や足を軽く叩いて注意すべきである。そうすれば、善いことと悪いことが、痛みをもって区別できるようになるはずである。痛みがその場面のイメージに付着していることが、肝腎な点である。

基本的に、道徳の基本である躾は、小学校に入学する前に、家庭で両親が子ども教えるべきである。なぜならば、体罰は、「教育基本法にある学校教育法第11条」¹³ において禁じられているからである。他方、家庭で両親が必要に応じて適切に子どもを叩くことは、法律で禁じられていない。両親がその責任において、体罰（子どもを必要に応じ、適切に叩くことによる苦痛）を加えれば、6歳になって小学校に入学する頃には、体罰を加えなくとも、先生の言うことを理解し、守れるほどの経験と体験に基づいた分別を身につけることができるであろう。

体罰は、思春期が始まりかける10歳ころまでが有効であると思われる。それ以降は、「我」が形成され始めて、素直には先生の言うことを聞かなくなるし、体も結構大きくなって、実力行使に出たとき、必ずしも先生が生徒に勝てる状況にあるとは限らない。躰は、大人が子どもに対して、肉体的に圧倒的な優位にあるときに、教えなくてはならない。そして、この躰の伝授には、肉体的苦痛を伴わせることが肝腎である。

筆者も、中学校・高等学校における体罰には反対である。しかしながら、家庭における躰が身についていない場合、教師は、どうしても学校で基本的な躰・道徳を教えざるをえない。とはいえ、それも小学校低学年までが限界である。それ以降に躰・道徳の基本を教えることは、至難の業である。小学校低学年において躰・道徳の基本を教える際には、体罰の代わりに、禅寺の修業で用いられている「警策」（きょうさく）を導入することを提案する。しかも、この警策を小学生に加えるときには、次の条件を前提とする。

1. 先生が、生徒のどこが悪かったのか、その生徒ならびに学級の生徒に説明する。
2. 先生は、「この生徒が立派な人間に成長するために、警策を加えます」と、口頭で宣言する。この手続きによって、先生の怒りの感情は、いくぶんなりとも和らげられる。
3. 警策は、ある程度の苦痛を加えるように、肩に与える。教師になるためには、この警策の与え方の講習を必修科目とする。

光市の事件のように、他人の妻と子どもを自分の情欲のために殺害し、なんの反省もないような極悪犯罪者には、「それ以上の犯罪を犯して人生を台無しにする前に、死刑に処して、それ以上の犯罪をさせないようにしてあげること、人間としての慈愛（Compassion）であること」を理解しなければならぬであろう。

まとめ

テーマ	項目	内容	意見・結果	比率
1. 善と悪について	善の内容		1. 協力・協調・思いやり・ 激励・相互の信頼	11.52%；全体243名 中の28名
			2. 約束・規則の履行, マナー・ 時間を守る	6.99%；全体243名 中の17名
			3. 正義・誠実・真実（正直） ・嘘をつかない	6.99%；全体243名 中の17名
	悪の内容		1. 規則・約束の不履行, 時 間を守らない, マナー違反	10.65%；全体244名 中の26名
			2. 嘘をつく・人をだます	9.42%；全体244名 中の23名
			3. 殺傷	9.42%；全体244名 中の23名
2. 『白雪姫』における継母の 残酷な処刑について	賛否		賛成：6名	22.22%；全体27名
			反対：19名	70.37%
			保留：2名	7.4%
3. 死刑について	賛否		賛成：24名	85.71%；全体28名
			反対：2名	7.14%
			保留：2名	7.14%
4. 善悪に関する家庭内での教 育について	意見の内容		1. 家庭が善悪の判断力を身 につける場	75%；全体28名の21 名
			2. 童話・絵本の読み聞かせ	10.71%；全体28名 の3名
			3. 自然と身につける	10.71%；全体28名 の3名
5. 善悪に関する小学校の教育 に対する提言	意見の内容		1. 授業や話し合いの中で	代表的意見
			2. 実生活の中で	
			3. 教師の指導力によって	
6. 体罰について	賛否		賛成：9名	32.14%；全体28名
			反対：17名	60.7%
			保留：2名	7.14%
7. グリム童話における残酷な ものの取扱いについて	必要性		必要：25名	92.59%；全体25名
			不必要：1名	4%
			保留：1名	4%

「適度な体罰」は、小学校低学年において基本的道德規則を身をもって学ばせるためには必要である。しかし、体罰は教育基本法において禁じられているので、その代わりに禅における「警策」を導入することが求められる。

注

- 1 Vgl. Rosenkranz, Karl: Ästhetik des Häßlichen. Verlag der Gebrüder Bornträger, Königsberg 1853. Neudruck: WGB, Darmstadt 1973, im Vorwort, S.III ff.
- 2 元少年, 死刑の可能性*最高裁, 無期を破棄*
光市母子殺害*高裁に審理差し戻し

山口県光市で99年, 主婦(当時23)を強姦しようとして死なせ, 長女(同11ヶ月)も殺害したとして殺人と強姦致死, 窃盗の各罪に問われた元少年(25)に対し, 最高裁第三小法廷(浜田邦夫裁判長)は20日, 無期懲役とした二審・広島高裁判決を破棄し, 審理を差し戻す判決を言い渡した。第三小法廷は「元少年の責任は誠に重大で, 特に酌むべき事情がない限り死刑を選択するほかない」などと指摘した。差し戻し審で元少年に死刑が言い渡される公算が大きくなった。

最高裁が死刑求刑事件で二審の無期懲役判決を破棄した例としては, 4人が射殺された「永山事件」(83年)がある。それ以降では, 殺人強盗で服役し, 仮出所中に広島県内で強盗目的で老女1人を殺害した被告に対する判決(99年)以来だ。

第三小法廷は, 元少年の犯行について, 「強姦目的で主婦を殺害し, 犯行発覚を恐れ, いたいけな幼児まで殺害し悪質だ」と指摘。そのうえで, 二審が情状酌量の対象とした①殺害は事前に計画していなかった②矯正教育による更生可能性——の各事情について検討した。

①については, 「強姦を計画し, 反抗抑圧や発覚防止のために実行した各殺害が偶発的とはいえない」とし, 「殺害に計画性がないことは, 死刑回避を相当とする特に有利に酌むべき事情と評価するには足りない」と判断。

次に, ②については, 元少年が被害者を^{やめ}擲する内容の手紙を友人に送っていることなどを踏まえ, 「罪の深刻さと向き合って内省を深めていると認めることは困難だ」とした。

判決は, 結局, 元少年にとって酌むべき事情は「犯行時18歳になって間もない未成年であったこと」とし, 「死刑を回避すべき決定的な事情とまでは言えない」と判断。二審判決について「量刑は甚だしく不当で, 破棄しなければ著しく正義に反する」と結論づけた。

差し戻し審では, 元少年への有利な情状があるかどうか審理される。元少年側の対応によって遺族の処罰感情が和らぐなどの新たな事情が加わらない限り, 死刑判決が出される可能性が高い。

浜田裁判長(退官)と上田豊三, 藤田宇靖, 堀籠幸男の各裁判官の4人全員一致による結論。

解説 「凶悪なら厳罰」示す

光市母子殺害事件で最高裁第三小法廷は、二審の無期懲役判決を破棄した。「強姦（ごうかん）目的で主婦を殺害し、乳児まで巻き添えにした」という犯行の悪質さと、未成年だったという二審が重視した「酌むべき事情」とをてんびんにかけたとき、死刑を回避し、無期懲役とする十分な理由が見いだせない、とした。特に、少年だったことを「考慮すべき一事情にとどまる」と判示したことは注目される。

死刑を選択するかどうかの基準となっている「永山事件」の最高裁判決（83年）以降では、犯行時少年の被告に対する死刑判決が確定したのは永山事件も含め3件だけで、いずれも4人を殺害した。被害者数が今回と同じ2人で無期懲役にとどめたいいわゆる「アベック殺人」の例もあり、第三小法廷は、過去の裁判例に比べて「永山基準」を被告に厳しく当てはめたといえる。

少年法の規定では、18歳未満の少年に死刑は言い渡すことはできず、ある刑事裁判官は、「18歳以上でも少年には死刑判決を出しにくい感覚があることは事実」と認める。しかし、第三小法廷は未成年であることに「相応の考慮を払うべきだが、決定的な事情とまではいえない」との立場を取った。

一方で、より重視したのは、「強姦目的」と「幼児までも殺害」という悪質性だ。たとえ少年でも、凶悪な犯行ならば厳罰で臨む姿勢を示したことは、今後の下級審の量刑判断にも大きな影響を与えそうだ。（大島大輔）

キーワード：光市母子殺人事件＊ 99年4月、山口県光市の団地で主婦（当時23）と長女（同11ヶ月）が死んでいるのを帰宅した夫（30）が発見した。同じ団地に住む、当時18歳になったばかりの被告が主婦の首を絞め、長女を床にたたきつけたうえでひもで首を絞めて殺害したとして、00年の一審・山口地裁と02年の二審・広島高裁はいずれも無期懲役刑を言い渡した。死刑を求刑した検察側が上告し、4月に弁論が開かれた。

3 飲酒運転手の車に息子ひき逃げされ死亡

「なぜ重い罪適用されぬ」

悲痛の母親県警に質問状

旧名瀬市（現奄美市）で飲酒運転の車によるひき逃げで男性が死亡した事故で、男性の母親、佐藤悦子さん（54）＝大分県国東市＝が3日、県警に捜査内容を明らかにするよう求めた公開質問状を出した。「これは交通犯罪。なぜ危険運転致死罪が適用されなかったのか。捜査が適切だったのかを明らかにしたい」。質問状を受理した県警相談広報課は「内容をよく検討して適切な対応をする」と答えた。今月中に文書で回答する。一方、鹿児島地検には担当検察官との面会を求めたが、それはかなわなかった。

亡くなったのは佐藤さんの次男の隆陸さん（当時24）。奄美大島ではトンネル工事の仕事に従事していた。事故は03年11月16日未明に起きた。ひき逃げした男（当時19）には、鹿児島地裁名瀬支部から04年3月に、業務上過失致死罪などで懲役3年が言い渡されている。

事故当時、車を運転していた男は事故発生から約4時間半後に名瀬署に出頭、呼気から検出されたアルコール濃度は酒気帯びを少し超えるぐらいだった。

男の供述調書では、事故直前までに缶ビールと発泡酒約5.4リットルと焼酎水割り4杯を飲んだとされたが、刑事裁判で検察側は、一緒に飲んだ男の友人や事故の目撃者の詳しい証言を証拠として提出しなかった。

「約6リットルも酒を飲んだ男が正常に運転できるはずがない。証言が調書化されていれば、危険運転致死罪を適用できたのでは」と佐藤さんは疑問を投げかける。

約2週間前に、男が事故直前まで一緒に飲んでた友人の男性を突き止め、電話で話した。その友人は「（男は）ふらふらで運転できる状態ではなかった。そのことは名瀬署にも伝えた」と話したという。

佐藤さんは2日夜には鹿児島地検の久保田明広検事正（55）と2時間半面会した。久保田検事正は当時の検察官の説明不足などを認めたが、「捜査は適正だった」と話したという。佐藤さんは改めて地検に質問状を出したいとしている。

「国家賠償を求めるに値するという思いを強くした。しかし悲しみを抱え、ぎりぎりで生きている私たちに、そのエネルギーがあるかどうか」。佐藤さんは疲れ切った顔をゆがめた。

- 4 梅内幸信『童話を読み解く』同学社、1999年、32-33ページ参照。
- 5 Vgl. Jolles, André: Einfache Formen. Max Niemeyer, Tübingen 1972, S.240 ff.
- 6 Ranke, Kurt: Betrachtungen zum Wesen und zur Funktion des Märchens. In: Wege der Märchenforschung. Hrsg. von Felix Karlinger. WBG, Darmstadt 1973, S.320-360.
- 7 Vgl. Lüthi, Max: Märchen. J.B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart 1974, S.62.
- 8 筆者訳の『白雪姫』を、ここに紹介する。

『白雪姫』（KHM53）

グリム兄弟・編
梅内幸信・訳

むかしむかし、真冬のある日のことでした。雪が、まるで鳥の羽のように、空から

舞い落ちていました。そんなとき、一人のお妃さまが、真っ黒なコクタンの木で枠どりされた窓のそばに座って、針仕事をしておりました。ぬいものをしながら、降る雪を見上げたとき、お妃さまは、針で指を刺してしまいました。すると、血が三滴、雪の上にたれました。その赤い色が、白い雪にしみると、とても美しく見えたので、お妃さまは、心の中で、こう考えました。「雪のように肌が白く、血のように赤い唇をし、窓枠のように黒い髪をした子どもが欲しいものだわ。」そのごまもなく、お妃さまは、一人の女の子を産みました。その女の子は、肌は雪のように白く、唇は血のように赤く、髪はコクタンの木のように黒かったので、「白雪姫」と呼ばれました。ところが、この白雪姫が生まれると、お妃さまは、亡くなりました。

一年たつと、王さまは、新しいお妃さまをもらいました。そのお妃さまは、美しい女でしたが、うぬぼれが強く、思い上がった女でしたから、きりょうが良いことにかけて、他人に負けることにはがまんができませんでした。お妃さまは、一枚のふしぎな鏡をもっておりまして。お妃さまは、その前に立って、鏡の中をのぞきこんで、こう言いました。

「壁の鏡よ、教えておくーれ、
国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は答えました。

「お妃さま、国中で一番の美人は、お妃さーま。」

これを聞くと、お妃さまは満足しました。というのも、お妃さまは、鏡がうそをつかないということを知っていたからです。

さて、白雪姫は大きくなり、どんどん美しくなりました。白雪姫は、七歳になると、まるで澄みわたった日のように美しく、お妃さまその人よりも美しくなりました。あるとき、お妃さまが、鏡に向むかって、こうたずねました。

「壁の鏡よ、教えておくーれ、
国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さーま、
けれど、あなたより千倍も美人なのは、白雪姫さーま。」

これを聞くと、お妃さまは、ねたましさのあまり、顔色が土気色になったり、真っ青になったりしました。このとき以来、お妃さまは、白雪姫を見るたびに、はらわたが煮えくり返るほど、白雪姫がにくらしくてたまりませんでした。やがて、ねたみと思いがりが竹の子のように育って、お妃さまの心の中であまりにも大きくなったものですから、お妃さまは、昼も夜も、気の休まるひまもないほどでした。そこで、お妃さまは、狩人を呼んで、こう言いました。「あの子を森の中へつれてっておくれ。わたしは、あの子をもう二度と見たくない。森であの子を殺して、その証拠として肺臓と肝臓とをもち帰るのだよ。」狩人は、お妃さまの言い付け通り、白雪姫をつれだしました。狩人が獵刀をぬいて、なんの罪もない白雪姫の胸をくし刺しにして殺そうとしたとき、白雪姫は泣きだして、こう言いました。「ねえ、狩人のおじちゃん、命だけは助けてちょうだい。あたし、このこわい森の中へ入って、もうぜったいおうちへはもどらないから。」白雪姫は、とてもかわいい子でしたから、狩人はついあわれに思って、「それじゃお行き、かわいそうにな」と言いました。「どうもうな、けものが、まもなくおまえを食っちまうんだろなあ」と、狩人は考えましたが、それでも、白雪姫を自分で殺す必要がなくなりましたので、まるで自分の胸にのっかっていた重石が、ころげ落ちたかのように、気が楽になりました。ちょうど、うまいぐあいに、一匹のイノシシの子が跳びだしてきましたので、狩人は、それを殺して、その肺臓と肝臓を取りだし、証拠の品として、お妃さまのところへもち帰りました。料理人は、その肺臓と肝臓を塩ゆでにするよう言い付けられましたが、そうすると、そのよこしまな女は、それをたいらげて、自分では、白雪姫の肺臓と肝臓を食べたつもりでおりました。

さて、白雪姫は、かわいそうに、大きな森の中で、本当に一人ぼっちになってしまいました。白雪姫は、とてもこわくなりましたので、木々の葉を一枚、また一枚とながめておりましたが、どうしたらよいものか、見当もつきませんでした。そこで、白雪姫は、かけだしてみました。とんがった石ころを跳びこえたり、イバラを通りぬけたりしました。そのとき、こわいけものたちが、跳びでてきて、白雪姫のそばを通りすぎましたが、けものたちは、白雪姫にはなんの害もくわえませんでした。こうして、足の力の続くかぎり、白雪姫は、ひたすら先へ先へと進みました。やがて日も暮れそうになったころ、白雪姫は、一軒の小さな家を見つけましたので、休もうと思って、家の中へ入りました。家の中にあるものは、みんな小さかったのですが、でも、えも言われぬほど愛らしくて、清潔なものでした。そこには、白いテーブルかけをかけたテーブルが一つあって、その上には、七枚の小ちいさなお皿があり、お皿は一枚一枚に小さなスプーンがついていました。そのほかに、七本の小さなナイフとフォーク、そして、七つの小さなコップが置いてありました。壁ぎわには、七つの小さなベッドが並べられていて、雪のように白いシーツが、その上かけられていました。白雪姫は、とてもお腹がぺこぺこで、のどもカラカラでしたので、一枚一枚のお皿からちよっ

びりずつ野菜とパンを食べ、一つ一つのコップから、ちょっぴりずつブドウ酒を飲みました。というのも、一人の分からだけ全部取ってしまうつもりなどなかったからです。これがすむと、白雪姫は、とても疲れておりましたので、小さなベッドに入りました。でも、どのベッドも体に合いませんでした。あるものは長すぎ、あるものは短すぎました。とうとう、七番目のベッドが合いましたので、白雪姫は、その中に横になったまま、「神さまの御心のままに」と祈って、眠りこんでしまいました。

さて、真っ暗になると、この小さな家の主人たちが帰ってきました。それは、お山の中で、鉱物を掘りだしたり、切りだしたりしている小人たちでした。小人たちは、七つの小さなランプに火をつけました。すると、家の中が明るくなりましたので、小人たちは、だれかがうちの中へ入ったことに気づきました。というのも、中のようにすが、なにからなにまで、自分たちが出かけたときのまんまではなかったからです。最初の小人が、言いました。「おいらのイスの上に座って食べたのは、だれだい。」二番目の小人が、言いました。「おいらのお皿から食べたのは、だれだい。」三番目の小人が、言いました。「おいらのパンを食べたのは、だれだい。」四番目の小人が、言いました。「おいらの野菜を食べたのは、だれだい。」五番目の小人が、言いました。「おいらのフォークでつついたのは、だれだい。」六番目の小人が、言いました。「おいらのナイフで切ったのは、だれだい。」七番目の小人が、言いました。「おいらのコップから飲んだのは、だれだい。」それから、最初の小人があたりを見回すと、自分のベッドのフトンが、ちょっとへこんでいるのに気づきましたので、こう言いました。「おいらのベッドに入りこんだのは、だれだい。」ほかの小人たちが、かけよってきて、叫びました。「おいらのベッドにも、だれか寝たぞ。」ところが、七番目の小人が、自分のベッドを見たとき、そこに横になって眠っている白雪姫の姿が目に入りました。そこで、この小人は、ほかの小人たちを呼びました。ほかの小人たちは、かけよってきましたが、そのおどろきのあまり、つい大声がでてしまいました。小人たちは、めいめい自分のランプをもってきて、白雪姫を照らしだして見ました。「こりゃー、おどろきだ！ こりゃー、おどろきだ！」と、小人たちは、叫びました。「なあんて、かわいい子どもなんだろう！」小人たちは、大喜びでしたので、白雪姫を起こさずに、そのままベッドに寝かしておいてあげました。そうして、七番目の小人は、自分の仲間のベッドで、一時間ずつ眠りました。やがて、夜が明けました。

朝になって、目をさまし、七人の小人たちを見たときに、白雪姫は、びっくりしてしまいました。でも、小人たちは親切で、「名前は、なんていうの」とたずねました。「あたし、白雪姫」と、白雪姫は答えました。「どうして、おいらたちの家にきたんだい」と、小人たちは、続けてたずねました。そこで、白雪姫は、小人たちに、ママ母が自分を殺させようとしたこと、けれども、狩人が命を助けてくれたこと、それから、一日中かけ回って、最後にとうとうこの家を見つけたということを話して聞かせました。すると、小人たちは、こう言いました。「あんたが、おいらたちのうちのめんど

うを見て、炊事や洗濯をしたり、ベッドを整えたり、針仕事や編物をして、なにからなにまできちんと片付け、清潔にしてくれたなら、あんたはおいらたちのところにいいし、それに、なんにも不自由させないよ。」そこで、白雪姫は、その約束をかわして、小人たちのもとにとどまりました。白雪姫は、おうちをきちんと整えました。小人たちは、毎朝お山へ出かけ、鉄鉱石や金鉱石を探し、夕方にはもどってきましたので、白雪姫は、それまでに小人たちの食事を準備して置かなくてはなりませんでした。白雪姫は、一日中一人でいました。そこで、親切な小人たちは、白雪姫に注意して、こう言いました。「まま母に気をつけるんだよ。まもなく、あんたがここにいることを知るだろうからね。だれも、うちの中へ入れちゃだめだよ。」

ところで、お妃さまは、白雪姫の肺臓と肝臓を食べたと思いこんでおりましたので、再び国中で一番の美人にほかならないと考えて、鏡の前に行って、こう言いました。

「壁の鏡よ、教えておくーれ、
国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さーま。
けれど、お妃さまより、千倍も美人なのはね、
お山の向こうの、小人たちのもとのね、
白雪姫さーま。」

これを聞いて、お妃さまは、びっくりしました。というのも、お妃さまは、鏡がうそをつかないことを知っていたからです。そこで、お妃さまは、狩人が自分をだましたこと、そして、白雪姫がまだ生きていることに気づきました。こうなると、お妃さまは、どのようにして白雪姫を殺してやろうかと、また最初から考えに考えぬきました。というのも、お妃さまは、自分が国中で一番の美人になれば、ねたましく思うあまり、心のやすまるひまがなかったからです。とうとう、お妃さまは、いい考えをひねりだし、自分の顔に絵の具をぬって、商いばあさんのようなかっこうをしましたので、お妃さまだとは、まったく分からなくなりました。このかっこうで、お妃さまは、七つのお山をこえて、七人の小人たちの家へ行くと、戸をたたいて、「きれいな品物、いらんかねえ！　いらんかねえ！」と呼びかけました。白雪姫は、窓から顔を出してのぞくと、こう言いました。「こんにちは、おばあさん、どんなものを売っているの。」「いい品物じゃ、きれいな品物じゃよ」と、おばあさんは答えました。「色とりどりの飾りひもじゃよ」と言っ、おばあさんは、色とりも豊かな絹で編んだ一本の飾りひもを取りだしました。「こんないいおばあさんなら、中へ入れてもか

まわらないわ」と、白雪姫は考えて、戸のかんぬきをはずして、そのすてきな飾りひもを買いました。「おやまあ」と、おばあさんは言いました。「なんてかっこうしてるんだねえー！ さあ、おばあさんが、一つあんたの飾りひもをしめてあげるよ。」白雪姫は、まるで人をうたがう気持ちがないものですから、おばあさんの前に立って、その新しい飾りひもをしめてもらいました。ところが、おばあさんは、すばやくひもをつかんで、とてもきつくしめつけましたので、白雪姫は、息がとまって、死んだようになり、たおれてしまいました。「これで、国中で一番の美人も、おしまいじゃ」と、おばあさんは言って、急いで家を出ました。

それから、まもなくして、日暮れになると、七人の小人たちは、家に帰ってきました。ところが、かわいい白雪姫が土間にたおれて、死んだようにピクリとも動かないのを見たとき、七人の小人たちは、ひどくおどろいてしまいました。小人たちが白雪姫をだき起こしてみると、白雪姫の胸がひもできつくしめつけられていることが分かりましたので、小人たちは、その飾りひもを真っ二つに切りました。すると、白雪姫は、ちょっと息をし始め、だんだんと元気になりました。小人たちは、どうしてそんなことになったかを聞くと、こう言いました。「商いのおばあさんは、まちがいなくお妃さまだったのさ。気をつけるんだよ。おいらたちがそばにいないときにゃ、だれも中へ入れちゃだめだよ。」

さて、よこしまな女は、家に帰ると、鏡の前へ行って、こうたずねました。

「壁の鏡、教えておくーれ、
国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は、この前と同じように答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さーま。
けれど、お妃さまより、千倍も美人なのはな、
お山の向こうの、小人たちのもとのな、
白雪姫さーま。」

お妃さまは、これを聞くと、全身の血が頭にのぼって、カッカとするほどおどろきました。というのも、白雪姫が再び生き返ったことが、はっきりと分かったからです。「いいか、見ていろ」と、お妃さまは言いました。「今度こそ、いい考えをひねりだして、おまえを殺してやるわい。」こう言って、お妃さまは、こころえのある魔術で、毒のあるクシを一つ作りました。それから、お妃さまは、前とは別のおばあさんに変装しました。そうして、お妃さまは、七つのお山をこえて、七人の小人たちの家へ行き、戸をたたいて、こう呼びかけました。「いい品物は、いらんかねえー、いらんか

ねえー！」白雪姫は、窓から顔を出して、こう言いました。「もう、向こうへ行っちゃだいな、あたし、だれも中へ入れちゃいけないの。」「見るだけなら、よござんしょ」と、おばあさんは言って、毒のあるクシを取りだして、それを高くかざして見せました。すると、そのクシは、子どもの白雪姫には大変気に入ったものですから、それに心がうばわれて、戸をあけてしまいました。白雪姫が、そのクシを買うことにきめると、おばあさんは、こう言いました。「それじゃ、わしが一つ、おまえさんの髪をちゃーんとすいてあげよう。」かわいそうに、白雪姫は、なんにもうたがわず、おばあさんの言うままにさせました。ところが、おばあさんが、クシを白雪姫の髪に刺すと、たちまちクシの毒が回って、白雪姫は、気を失って、たおれてしまいました。「絶世の美人さんよ、これでおまえさんも、あの世行きじゃよ」と、よこしまな女は言って、家を出ました。けれども、さいわいなことに、まもなく日が暮れて、七人の小人たちが家に帰ってきました。小人たちは、白雪姫が死んだようになって土間にたおれているのを見たとき、すぐさま、よこしまなまま母にうたがいをかけましたので、あたりを探して、毒のあるクシを見つけました。そこで、小人たちが、そのクシを髪からぬき取ると、白雪姫は、再び息をふきかえして、それまでのできごとを小人たちに話して聞かせました。これを聞いて、小人たちは、ちゃんと気をつけて、だれがきても戸をあけないように、白雪姫にもう一度念をおして注意しました。

お妃さまは、家に帰ると、鏡の前へ行って、こう言いました。

「壁の鏡よ、教えておくーれ、
国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は、この前と同じように答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さーま。
けれど、お妃さまより、千倍も美人なのはね、
お山の向こうの、小人たちのもとのね、
白雪姫さーま。」

お妃さまは、鏡がこのように言うのを聞くと、いかりのあまり、体をブルブルふるわせました。「白雪姫のやつ、殺してくれる」と、お妃さまは叫びました。「たとえ、あたしの方が死ぬことになろうともな。」こう叫ぶと、お妃さまは、だれもこない、秘密の隠れがに入って、毒毒しい毒リンゴを一つ作りました。そのリンゴの見かけは、とても美しく、青地に赤いほっぺをもったリンゴで、そのリンゴを目にした者はだれでも食べたくなくなってしまうのでした。ところが、それを一口食べたら、その人は死ぬしかありませんでした。リンゴができあがると、お妃さまは、顔に絵の具をぬって化

け、百姓女の着物を着こみ、そうして、七つのお山をこえ、七人の小人たちの家へと向かいました。百姓女が戸をたたくと、白雪姫は、窓から顔を出して、こう言いました。「だれもおうちへ入れちゃいけないの。七人の小人さんたちに、だめってきつく言われているから。」「かまやしないよ」と、百姓女は言いました。「あたしゃ、リングをね、みんな片付けてしまいたいだけなのさ。ほら、あんたにも一つあげましょ。」「いないわ」と、白雪姫は言いました。「なんにももらっちゃいけないのよ。」「毒でも入っているんじゃないかって、こわがってでもいるのかい」と、百姓女は言いました。「ほーら、いいかい、リングを二つに切るからね。赤い方を、あんたがお食べ。わたしゃ、青い方でいいから。」ところが、このリングは、とてもじょうずに作ってあって、赤い方にだけ毒が入っているのです。白雪姫は、そのみごとなリングを食べたくてしょうがありませんでしたので、百姓女がそのリングを食べるのを見ていると、もうそれいじょうがまんができなくなって、手をさしだして、毒のある方のリングを取りました。そして、白雪姫がそのリングを一かじりして口に入れると、たちまち白雪姫は、土間へたおれて、死んでしまいました。すると、お妃さまは、ぞっとするようなおそろしい目つきで白雪姫を見つめていましたが、大声で笑いだして、こう言いました。「お肌が雪のように白いわねえ、唇が血のように赤いわねえ、髪がコクタンの木のように黒いわねえ！ 今度ばかりは、小人どもにも、おまえの目をさますことなんか、できやしない。」そうして、お妃さまが家に帰って、鏡にたずねました。

「壁の鏡よ、教えておくーれ、
国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は、ついにこう答えました。

「お妃さま、国中で一番の美人は、お妃さーま。」

これを聞くと、お妃さまの嫉妬心も、それなりには落ち着きました。小人たちは、日が暮れて家にもどってくると、土間に白雪姫がたおれているを見つけました。白雪姫は、もはや息をしているけはいもありません。もう、死んでしまったのです。小人たちは、白雪姫をだき起こし、なにか毒のついたものはないかと探してみました。それから、胸の飾りひもをといたり、髪をといたり、体を水やブドウ酒で洗ったりしました。けれども、なんの役にも立ちませんでした。かわいい子どもは、死んで、生き返ることはありませんでした。小人たちは、白雪姫を棺台の上へ寝かせ、七人が七人とも棺台にすがって、白雪姫の死をなげき悲しみ、三日間泣き通しました。それから、小人たちは、白雪姫を埋葬しようとしてしました。けれども、白雪姫は、まだ生きている人間のように、みずみずしく見えましてし、それに、まだ美しくて赤いほっぺを

していました。小人たちは、「こんな白雪姫を、黒い土くれの中へうめるなんてできないよ」と言いました。そこで、小人たちは、白雪姫が四方八方から見えるように、ガラス製のすき通った棺を作らせ、白雪姫をその中へ寝かせました。それから、小人たちは、棺の上に、金文字で白雪姫の名前を書き、また、そこに王さまの娘という身分もしるして置きました。そのあとで、小人たちは、棺をお山の上にすえて、七人のうちの一人が、いつでもそこにとどまって、棺の番をしました。すると、いろんな動物たちもやってきて、白雪姫の死を悲しんで、涙を流しました。最初にはフクロウがやってきて、次にはカラスがやってきて、最後にハトがやってきました。

こうして、白雪姫は、とても長い間、棺の中に横たわっておりましたが、くされくちることはありませんでした。それどころか、白雪姫は、まるで眠っているかのように見えました。というのも、白雪姫の肌はまだ雪のように白く、唇は血のように赤く、そして、髪はコクタンの木のように黒かったからです。ところが、ある日のこと、一人の王子さまが、森の中へまよいこんで、小人たちの家にやってきて、そこに泊めてもらうということがありました。王子さまは、お山の上で例の棺を見つけ、その中にいる美しい白雪姫を見つめ、棺の上に金文字で書かれていることも読みました。すると、王子さまは、小人たちに向かって、「この棺を、ぼくにゆずってください。お礼なら、あなたがたの好きなだけあげますから」と言いました。けれども、小人たちは、こう答えました。「世界中のお金を全部くれても、この棺はあげません。」そこで、王子さまは言いました。「それでは、その棺を、ぼくのおくり物にしてください。なんといっても、ぼくは、白雪姫を見ないでは生きて行けないんだから。ぼくは、白雪姫をぼくの一番大切なものとして、心から大事に見守るつもりだよ。」王子さまが、こう言うと、心根のよい小人たちは、あわれに思って、王子さまに棺をあげました。こうして、王子さまは、その棺を自分の召使いたちにかついで運ばせました。すると、召使いたちは、やぶに足をとられて、よろめいてしまいました。ゆれたひょうしに、白雪姫がかみくだいてのんでいた毒のあるリンゴのくいかけがのどから飛びでて、白雪姫は、再び息をふきかえました。それで、白雪姫は、体を起こすと、こう言いました。「あら、どうしたんでしょ、あたし、どこにいるのかしら。」王子さまは、喜んで、こう言いました。「あなたは、ぼくのそばですよ。」こう言って、王子さまは、これまで起きたことを白雪姫に話して聞かせてから、「ぼくは、世界中のだれよりも、あなたが好きです。ぼくといっしょに、父上の城へ行きましょう。ぼくは、あなたを妻として迎えるつもりです」と言いました。すると、白雪姫も、王子さまを好きになり、王子さまについて行きました。こうして、二人の結婚式が、とても盛大に、そして、はなやかに整えられました。

さて、結婚のお祝いには、白雪姫のばちあたりのまま母も招待されておりました。まま母が、美しい衣装を身につけたとき、鏡の前へ行って、こう言いました。

「壁の鏡よ、教えておくーれ、
国中で一番の美人は、だーれ。」

すると、鏡は、こう答えました。

「お妃さま、この国で一番の美人は、お妃さーま。
けれど、お妃さまより、千倍も美人なのは、白雪姫さーま。」

これを聞いて、よこしまな女は、呪いの文句をはきましたが、とても不安で不安で、どうしたらよいのか分からないほどでした。ママ母は、初め結婚式へ行くのは、きれいさっぱり忘わすれようかと思いました。けれども、それはまたそれで落ち着きません。ママ母は、どうしても出かけて、その若い女王を見ずにはいられませんでした。こうして、ママ母がお祝いの広間に入ると、ママ母は、その若い女王が白雪姫であることに気づきました。ママ母は、おどろきと不安のあまり、その場に立ちすくみ、身じろぎすらできませんでした。ところが、すでに鉄製の靴が炭火の上に乗せられていて、真っ赤に焼けた鉄の靴が、広間に運びこまれてきました。ママ母は、その真っ赤に焼けた鉄の靴をはいて、踊らなければなりません。ママ母の両足は、ひどく焼けたされましたが、それでも踊りをやめることは許されませんでした。とうとう、ママ母は、踊り死んでしまいました。

9 村野薫『処刑・拷問具大全』同文書院、1997年。

処刑について

「揺りカゴ（ファス）」とは内側に釘などを埋め込んだ鉄製の舟で、この中に手足を縛った人間を入れて揺すぶる。また「野うさぎ」とは針を仕込んだ長い木製のローラーで、ベンチなどに裸で固定しておいてその上を転がしたり、反対に身体の下に敷いたりして使う。そして「首の環（サッチェンタージ）」とは内側一面に針の付いた鉄製の輪で、これを首にはめられると身体を屈めることはおろか首をまっすぐに伸ばした姿勢しかとれず、眠ろうにも眠れないというものだった。

それぞれに特徴があるが、もちろんドイツ人の創案というわけではない。「揺りカゴ」の場合、その原型といわれるものには、内側にトゲや釘を仕込んだ樽というのが古くからあった。カルタゴ人の捕虜となったローマの将軍レグルスもこの方法で殺されたというが、こうした樽に入れて崖や坂道から転がしたり馬車につないで引きずったりするのである。また同様のものは、日本軍が中国で使った拷問具のなかにも見つっている。それは鉄棒の内側に釘を植え込んだ直径一メートルほどの円筒形の檻で、この中に人を入れ転がしたものである。

一方、「野うさぎ」については、トゲのある植物や尖った瓦礫の破片の上に寝かせ

て拷問していたことがその初めだと考えられるが、中国・秦時代には「^{せいきよく}穿棘」といって棘の穴に突き落とす刑もあった。(58-59ページ。)

砕く処刑

「車輪もしくは鉄棒で打ち砕く回数は、のち最高40回にまで増えた。そのため職務に忠実なニルンベルクの執行吏シュミットは、特別な指示がないかぎり40回までけっして相手を殺さないよう慎重に打ち続けたというが、この間、受刑者の骨はずたずたに折れる。

そして最後の回数まで打ち終わると、死んでいようが、まだ息があろうが、執行吏はきちんと打ち砕いたことを示すため（受刑者の顔を太陽に向けるためもあるが）、踵を後頭部に付けたり腕や脚を複雑に幅や外輪にからませたような格好で車輪にのせ、天に捧げたのである。」(52ページ。)

10 「週間朝日」平成18年1月6・13日号

再犯を繰り返した小田島被告＊『犯罪者の「更正」考』＊

出所者の約半数が逆戻りする実態＊刑務所での“謀議”が現実化する「犯罪学校」＊
専門家が語る再犯防止…＊

「警察庁指定124号事件の犯人、小田島鉄男被告（62）は、4人を殺害し、数多くの遺族たちを苦しみと悲しみに突き落とした。犯罪者がいなければ、犯罪被害者は生まれない。だが、刑務所を出所する約半数は5年以内に逆戻りしている。小田島被告も、刑務所での受刑者への自慢話が事件のきっかけだったと話す。再犯防止に、刑務所は機能しているのか。刑務所の実態や小田島被告の肉声を振り返り、専門家の意見を聞いた。」

「府中刑務所を見学したことがあります。こんな立派な施設で、衣食住の不自由なく過ごしているんだなと思いました。受刑者の平均服役回数は4.5回だそうです。全然、矯正されていないんですね。あれは矯正施設じゃない、ただ労働させているだけなんですよ。」

〔中略〕

「刑務所の刑務官から、こう言われたことがあります。『懲役に入るような人間は、まず親の言うことを聞かない。学校の先生の言うことを聞かない。その結果、社会の法律を守らない。そういう人間をわれわれの力で更正させられるなんて、思っていない。刑務所にいる間だけ中の規則を守って、なるべく早く出られるようにやれ』

少なくとも、刑務所は更正への矯正教育をする所ではなかったと思います。懲役の身ですから、自由の制限は仕方ない。でも、社会に出たときに社会にとけ込むにはど

うすればいいのか、そういうことを教えてもらいかったと思います」

本当の更正は100人中5人

阿部譲二氏*あべ・じょうじ*作家。1937年生まれ。86年、自身の服役体験から、府中刑務所の受刑者たちを描いたデビュー作『塀の中の懲りない面々』（文藝春秋）がベストセラーに。

「残念ながら、日本の刑務所は全く更正の役には立っていないと思うよ。少なくとも僕は、矯正教育なんて受けた覚えはないね。

最初に服役したのは19歳のとき。暴行傷害罪で懲役1年6月の刑で大津刑務所に入った。その後、出たり入ったりを繰り返して、75年には銃刀法違反などで府中刑務所にも入った。やっと刑務所と縁が切れたのは、42歳を迎えた79年の秋だったよ。通算10年以上服役したことになるな。

府中刑務所では木工工場で働かせられた。その技術水準は、実はたいへん高いんだよ。だから、服役当初は、「技術を見につければ出所後役立つ。頑張ろう」

と思っていたんだ。でも、ある日、ベテランの服役囚にこう言われた。

「一生懸命やっても無駄だぞ。お前が使ってるそんな工具、博物館にしかないような代物なんだから」

当時の備品は昭和初期の機械で、そんな古い機械を使う工場はない。骨董品を使う技術学んでも、意味がないって言うんだな。

「懲役」って、懲らしめて働かせるという意味でしょ。だから、看守はわれわれが黙って働きさえすればいいと思っているんだよね。

「幸せになってくれ」

なんて願ってくれる看守は、本当にいなかった。思い出したくもないような言葉を吐かれたことは何度もあったけどね。どんな言葉か？ 本当に思い出したくないから言わないよ。

受刑者同士の会話なんて、

「次はもっとうまくやって、捕まらないようにしよう」

そんな話ばかり。100人出所すれば、半分がまた懲役を食う。でも、半分の「戻ってこないヤツ」も、本当に足を洗ったのは5人ってとこだね。45人は、腕を上げて捕まらないだけ。二度と逆戻りしたくないなら、出所後に刑務所仲間と絶対に付き合わないことだね。

なぜ、犯罪を繰り返すのかって、シャバに出てもカネが稼げないからね。出所しても、仕事がない。うまくどこかに潜り込んでも、1年もたたずに職場に刑事が2人やってきて、上司に、

「阿部がご迷惑をかけていませんか」

って、聞いてくるんだよ。上司はびっくりして、

「まじめにやっています」

と答えるよね。すると、

「いやあ、まじめにやっていたらいいんです」

って言って帰る。でもね、上司は「何なんだろう」って調べるでしょ。そこで前科がバレる。もう、居られないよ。僕も23歳で試験に通って、日本航空のパイロットになった。でも、刑事のせいで前科がバレた。

僕は矯正なんて無理だと思っているよ。それに、刑務所の中にいる15%くらいは、今回の犯人のように、いつ凶悪犯に転落してもおかしくないヤツらだと僕は思っている。

作家デビューする際、「前科者」という目で見ないで好意を持って接してくれた妻や編集者たちに助けられて、僕は本当に刑務所との縁を切れた。そういう助けがなかったら、僕も凶悪犯になっていたかもしれないと思うな。

11 「朝日新聞」2006年7月5日（水）＊ヤギ被告に無期懲役＊広島女児殺害＊死刑適用退ける＊地裁判決「仮釈放、慎重に」

広島市で昨年11月、下校中の小学1年木下あいりさん（当時7）に性的暴行を加えて殺害したとして、殺人や強制わいせつ致死などの罪に問われたペルー国籍の無職ホセ・マヌエル・トーレス・ヤギ被告（34）に対する判決公判が4日、広島地裁で開かれ、岩倉広修（ひろみち）裁判長は無期懲役（求刑死刑）を言い渡した。判決理由で「児童を陵辱したあげく尊い命を奪った冷酷非情な犯行で社会にも多大な影響を与えたが、被害者は1人であり、矯正不可能とまでは言えない」と述べた。一方で、「一生をもって償わせるのが相当であり、仮釈放は可能な限り慎重な運用がなされるよう希望する」との意見も付け加えた。広島地検は控訴を検討する。

被害者が1人の殺人事件では、身代金目的の誘拐や仮釈放中の犯行といった事情がない限り、死刑適用が避けられる傾向にある。子どもを狙った事件が全国的に相次ぐ中、悪質な性犯罪を伴う今回の事件の量刑判断が注目されていた。

判決は、あいりさんの首に手で絞めたような内出血があることなどから被告に確定的殺意があったと認定し、殺意を否認した被告側の主張を退けた。また、殺害する前後に下半身を指で傷付け、自慰行為をした事実も認め、わいせつ目的の犯行だったと判断した。

被告側の「悪魔の声に支配され、善悪を判断できない状態だった」という主張については、「犯行を極めて詳細に供述し、精神障害をうかがわせる言動もない」として責任能力を認めた。

量刑判断の中で判決は、あいりさんが両親の愛情を一身に受けて育ったことや、幼い弟や家族思いのやさしい子だったことなどを詳細に記述。突然あいりさんを奪われた遺族の悲しみにも理解を示し、「死刑の適用基準を満たしていると考えてもあながち不当ではない」と述べた。

一方で、83年の最高裁判決が指摘した死刑選択の基準に触れながら、被害者の数や犯行の態様、前科の有無について検討。「被害者は1人とどまっているほか、犯行が計画的でなく衝動的で、前科も認められない」と指摘し、「矯正不可能な程度までの反社会性、犯罪性があると裏づけられたとまではいえない」と述べて、死刑選択には疑念が残ると結論づけた。

検察側は先月9日の論告求刑で、子どもの安全を脅かす事件が頻発する中、一般予防・社会防衛的な見地からも「従来の判例をあてはめず厳罰をもって臨むべきだ」として極刑を求刑していた。

おことわり 朝日新聞では、強姦（ごうかん）、強制わいせつなどの性犯罪を報道する際、被害者、遺族が実名報道や被害を明確にすることを望まない限り、被害者は匿名を原則とし、性被害の内容も簡潔な表現にとどめています。今回の事件では判決前、遺族から被害の実態を社会に知ってもらうため実名での性被害の詳細報道を求める要望があり、この事件では実名で性被害にも触れることにしました。

12 梅内幸信『悪魔の霊液』同学社、1997年、199-230ページ参照。

13 第1章「第11条 【学生生徒等の懲戒】 校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、監督庁の定めるところにより、学生、生徒及び児童に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない。」